

ズ・リュック・ズボン・軍手という古典的地理学生スタイルを笑われながら、先生方も学生諸氏も寛大で、よくして下さるので、大満足です。ただ一つ不平を言えば、大学は毎年入学科と検定料をとらないで、継続に抜ってほしいということです。（3回生）

日本国際地図学会昭和 54 年度定期大会に出席して

太 田 晴 子

8月2～3日私立郁文館高校で行われた地図学会の要旨と感想を述べ、諸先生、先輩方のご指導を仰ぎたい。

〔地図史に関して〕官撰明治国絵図についての斎藤敏夫氏の発表は興味深いものがあった。藩籍奉還に伴って作成された国絵図が日本各地の図書館などに死蔵されている。それらの図は地形表現の正確さ、機能と実用性に優れているので、その完璧な保存と今後の研究課題となるものである。その他ご老体に鞭打って発表された井阪篤子氏、大久保武彦、武田通治両先生がそれぞれの味わいある講演をされた。

〔地名について〕池上中学の前田吉穂氏、高輪学園の森秀雄氏からそれぞれ別の観点から発表された。私の仕事（百科事典の編集）とも関係する問題なので、意見の交換をすることができた。前田氏は住居表示と地番の混同や新しい地名が安易に付けられて、複雑化していくことへの警告、森氏は高等学校の地図帳において、地名が地図上をおおう率が高く、そのことが地図を見にくくしている要因の一つとして仮定した考察を発表された。特に中国関係は漢字とカタカナの二重表記のため、上海付近では地名の占める割合は35%にも達するというは驚きに値する。この発表に対して、中国や北方領土付近の地名を教育現場では、どのように扱っているかと質問したところ、「文部省の地名の書き方、呼び方について」の基準に従いながらも個々の地名に関しては教師個人の判断によるところが大きいとの答を得た。この件に関して、早稲田大学の久保武彦先生からスイスやフィンランドのような公用語の多数ある国では、その数だけ連記しているので、おのずと地名の占める割合が多くなっている。日本の地図帳でも重要な地名には2通り以上の連記（カタカナ・漢字・英語・原地語）が望ましいとの意見が出た。ただ教科書と一致させること、生徒の理解度も考慮すべきという問題が残されていることがはっきりした。

〔衛星画像の教育的利用〕航空写真と視覚、衛星画像合成の試作などの最も今日的な発表があり、航空写真や衛星画像が地図作成や教材として広く利用されていることが伺えた。ただここで最も驚かされたことは、鈴木信吉氏の航空写真と視覚の中で、左45°の光線で描かれたボカン地図の凹凸が、全ての人に必ずしも凹凸に見えないということである。10年前にもこの実験をした人があるが、結果は50、50であるとの意見が出された。しかし、私はボカン地図には、コンター（等高線）地図の正確さとは、また異なった良さがあるのではないかと考えている。私自身昨年夏に開かれたワシントンでの地図学会の際、フィリップ社の編集者と語り合ったことを思い出す。ヨーロッパでは、趣味的な地図としてボカンやケバを用いた地図を見受けるとのことである。

〔水路部関係〕地図学会では、かなり以前から水路部の方の研究発表があったにもかかわらず、私などは陸地にばかり関心があって、全く無関心の分野であったが、展示もかなり多く、少々興味を持った。

〔地形分類図、土地条件図などについての試案や考察〕学生時代の地図学演習を思い出しながら拝聴した。オーストラリアの Speight, G. J. 氏が発表された。日本の学会でオーストラリアの方が1人だけ発表されるときは、どうしてもオーストラリアの地図事情を期待してしまうのは、私だけであろうか。

〔その他〕「精密複写装置の研究開発」「写真製版工程の省略化に関する研究」「刷版用材料について」など実際に業務にたずさわっている方の発表は、理解の難易度とは別にたいへんさわやかな印象を残すものである。

最後に「地図の自動化に関するシンポジウム」があった。銀行や一般会社でコンピューターがすでにさまざまな方面で活用されている現在、このような問題を論ずるのは、時代遅れのように感ずるのは、コンピューターに振り回されて少々疲れ果てた私たち 40 才以上の者の共通した感覚の由であろうか。いやそれだからこそ、反省の意味も含めてより今日的な課題であるように思われた。私にとっては、スピーカーの発表の後で指名されて意見を述べられた大島氏の「userの needs によってDataをどのようにinputするか、はっきり決めてから取りかかると、また経済性を考えたうえで行う必要がある。」との意見に全く同感である。そして昨年アメリカの水路局やNASAの技術巡検で見た地図作成状況を思い出した。そこでは地図の複写や等深線の総描など単純な地図作成に使われていた。会場には多くの手作り地図作成者も出席されており、多くの要素を同時に盛り込んだ従来の一般図を作成するには、実際どのようにするのであろうかと考えこんだ人も多かったようである。

地図とは別の分野で、コンピューターを利用した経験があるが、地図情報の数値化への変換ほど膨大な労力を必要とするものはないと考える。特にinputの際にコーディングシートへ1文字、1文字の数字を鉛筆で書くあるいはタイプするという作業がある。その際、数字を1文字誤ってinputした場合銀行のように数字そのものを扱う場合はすぐ発見できるが、それが等高線のように線として描かれたならば、多少曲がっていてもそのまま発見されずに終る。正確なようで全く不正確なものになってしまう。日本人の器用さという特技を安易につぶすことはないように思われた。

スピーカーの1人から、数値化よりも航空写真のような画像を読み取り地図化する方向に進むのが望ましいとの意見が出された。これに関しては、先の大島氏も同意見で、写真情報を数秒で読み取り、数秒で完全な一般図が仕上がる技術の開発は目前に迫っているように思われる。そのときこそ、コンピューターの威力が十分に発揮されるであろう。(10 回生)

オランダの天然ガス

矢口文子

オランダでの生活も一年がたとうとしていた昨年秋、何か興味ある事はないか。と探していました